

(2) 生産システムの変遷

佐渡金銀山遺跡は日本を代表する金銀山遺跡であり、現在も生産最盛期の建物やその機械類等、生産システムに関連する施設が数多く残る。

主要な近代施設は相川地区（旧相川町）に多く遺存し、ここでは主に「採鉱・選鉱・製錬」が行われた。大立地区では「採鉱」、高任・間ノ山地区では「採鉱・選鉱・製錬・運搬」、北沢地区では「選鉱・製錬・火力発電」、大間地区では「鉱石や資材の搬出入」が行われ、また、戸地地区では「水力発電」が行われた。

ここでは佐渡金銀山が稼働していた当時、各地区が担っていた役割とその機能を図 4-2 に示し、その内容を地区ごとに整理した。また、施設ごとに変遷を整理し、その主な機能と工程を表 4-1、図 4-3 にまとめた。特に、新たな製錬法の導入や動力の転換等、大きな転換期のあった年に着目し、当時の生産システムの主要工程を担う施設についてその変遷を図 4-4 から図 4-7 に示した。

